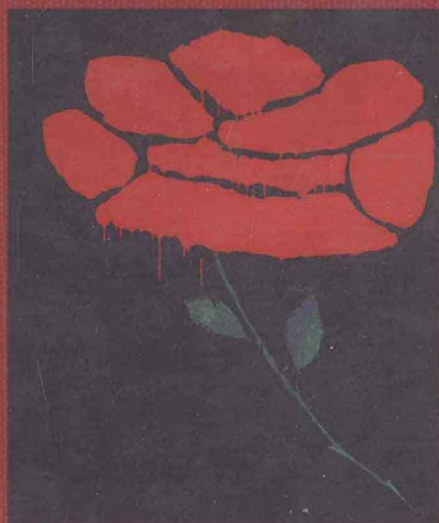


ENCIKLOPEDIJA MRTVIH

死者の百科事典

ダニロ・キシ

山崎佳代子◆訳



東京創元社

ENCIKLOPEDIJA MRTVIH

死者の百科事典

山崎佳子
江苏工业学院图书馆
藏书章

東京創元社



SELECTION

ENCIKLOPEDIJA MRTVIH

by Danilo Kiš

© The Estate of Danilo Kiš

This book is published in Japan

by TOKYO SOGENSHA Co., Ltd.

by arrangement with Mrs. Pascale Delpech

represented by Agence Hoffman, Paris

through le Bureau des Copyrights Français, Tokyo.

訳者紹介

山崎佳代子（やまさきかよこ） 1956年静岡生まれ。北海道大学露文科卒業。79年サラエボ大学に留学、ユーゴスラビア文学史を学び、86年ベオグラード大学文学部修士課程修了。現在、同大学日本学科助手、ベオグラード在住。主な著訳書に『解体ユーゴスラビア』（朝日選書）、詩集『鳥のために』（書肆山田）、ダニロ・キシュ『若き日の哀しみ』（東京創元社）がある。

[海外文学セレクション]

死者の百科事典

1999年2月22日 初版

著者———ダニロ・キシュ

訳者———山崎佳代子（やまさきかよこ）

発行者———戸川安宣

発行所———**（株）東京創元社**

〒162-0814 東京都新宿区新小川町1-5

電話 03-3268-8231（代）

振替 00160-9-1565

装幀———小倉敏夫

製版———フォレスト 印刷———光印刷

製本———鈴木製本

Printed in Japan © Kayoko YAMASAKI 1999

ISBN 4-488-01625-1 C0097

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社までご送付下さい。
送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

魔術師シモン	5
死後の栄誉	28
死者の百科事典	37
眠れる者たちの伝説	65
未知を映す鏡	90
師匠と弟子の話	104
祖国のために死ぬことは名誉	113
王と愚者の書	120
赤いレーニン切手	161
ポスト・スクリプトウム	175
愛と死の迷路——さすらい、または望郷	

山崎佳代子

死者の百科事典

僕の恋の熱狂は死と向き合っている
窓が中庭をのぞむように

—— ジョルジュ・バタイユ

魔術師シモン

1

ナザレ人イエスの死と不思議な甦^{よみがえ}りから十七年の後、サマリアを縦横に横切り、気まぐれな砂に埋もれて荒れ野に消えていく埃^{ほこ}っぽい道に、その男は姿を現わした。弟子たちに魔術師と呼ばれた男、魔術師シモンで、敵は軽蔑をこめて「泥の男」と呼んでいた。サマリアの、ギタとかいう田舎から来たのだと断言する者もあれば、シリアかアナトリアの出だと言う者もあった。認めないわけにはいかないが、そんな混乱が生じたのも、ひとつには彼自身のせいでもあった。なぜなら、どの生まれかという悪気のない問いに答えて、彼は手を大きく振ってみせたのだが、その動きには最初の村ばかりか地平線が半分も入っていたのだから。

中背で、筋肉質、髪の毛は縮れて黒く、頭頂が薄くなりはじめており、髭もやはり縮れてぼさぼさで、すでに白いものが混じっていた。曲がつて骨張った鼻をして、横顔は羊のようだった。片方の目はもう片方よりも大きくて、それが顔に少々皮肉な表情を与えていた。左の耳には、自分の尾を呑み込もうとする蛇^{かたじ}を象った金の耳飾りをつけている。麻縄を幾重にも身体に巻き付けていて、それは見世物の小道具にもなった。その縄が一瞬、ぴんと立つと、呆氣に取られている観客の目の前で、棒を

よじ登るように登つてみせるのだ。あるいは、その縄を牛などの首にかけ、呪文を唱えながら、刀をひと振り、首を切り落とす。瞬間、首と胴はばらばらに荒れ野の砂に転がっている。魔術師がそこで同じ呪文を逆さに唱えると、首は元通り胴とつながり、牛の首にかかつていた麻縄は地面に残る。シモンは結び目をほどこき、ふたたび縄の帯を締める。もつとも、見物人の中に、縄の繊維が何でできているか確かめたがる者がいたりすれば別である。そんな者には、シモンは堅くなった縄の端を、杖でも差しのべるように、差し出す。疑り深い者がつかむやいなや、縄はぐにやりとなつて地面に落ち、砂埃が立つのだった。

ギリシア語やコプト語、アラム語、ヘブライ語から土地土地の方言まで、どれも同じように上手に話せたが、敵によれば、どの言葉を話しても外国訛りがあつたという。シモンはそうした噂をあまり気にかけなかつたが、彼自身、その噂にまんざらでもない様子だつた。精力的で雄弁家だつたといわれる、とりわけ弟子や信奉者、あるいは集まつた群衆を前に話すときはそうだつた。「そんなときは、瞳が星のごとく輝いていた」と、弟子のひとりは言う。「狂人の声と放蕩者の眼差しをしていた」と、彼に反対する者のひとりは記している。

東から西へ、西から東へと続く絡み合つた道で、魔術師シモンは大勢の伝道者に出会ふが、彼らの道もしばしば交差していた。ヨハネとパウロの弟子たち、そしてヨハネとパウロ自身も、ナザレ人イエスの教えを世に広めていつたが、イエスの思い出はパレスチナやユダヤやサマリアの地にまだ生きている。シモンは村の入口で、よく彼らのサンダルの跡を見つけた。村はその時間にしては不思議なほど静まり返つていて、犬の吠え声や羊のかん高い鳴き声があった。それから、これもまた羊の鳴き声に似た男の声が彼方から聞こえてくる、かん高くよく澄んだ声だが、まだはつきりとは聞き取れない。

それは使徒たちで、ぐらぐらする樽にのほり、世界と神の創造の全きことを説いている。小屋などの陰に身を潜め、彼らが離れるのを待つて、シモンはその後から村に入っていく、村人がすっかり散り散りにならないうちに。

今度は彼がお付きの者に囲まれて、語りはじめる。使徒たちの勿体つけた話にうんざりして、皆はいやいや集まっている。「パウロとヨハネを今しがた見送つてきたばかりだぜ、もうたつぷり一年、お言葉はたくさんだ」

「私は使徒ではない」と、シモンは言った。「私はあなたがたと同じ人間なのだ。あの人たちは聖霊が降りるようにあなたがたの上に手を置く。だが、私はあなたがたを埃の中から引き出すために手を差しのべるのだ」そこで手を天に差しのべると、幅の広い袖はずり落ち幾重にも襞をつくり、そこから美しい白い腕と細い指とが現われた、怠け者や手品師にしか見られぬような。

「あの人たちがあなたがたに約束するものは」と、シモンは言葉が続ける。「永遠の救いである。私が約束するのは知識と荒れ野である。望む者は、私の仲間になるがよい」

人々はあちこちからやつて来るさまざまな漂泊者に慣れていた。多くは東方から来たが、ひとりのときもあれば、二人のときもあり、大勢の信者を従えていることもあった。村の入口や山の麓や近くの谷に騾馬や駱駝を置いて来る者もあり、武装した供の者を従えて来る者もあり（彼らの説教はむしろ脅迫か喜劇のようだった）、騾馬に乗つて来て、降りもせず、いきなり曲芸を始める者もあった。しかし、あるナザレ人の死を境に、ここ十五年ほどは、若くて元気な者たちがやつて来るようになった。手入れのいい髭をたくわえ、あるいはまだ髭も生えておらず、白い衣をまとい羊飼いの杖を手にして、だれもが使徒だ、神の子だと名乗っていた。サンダルは長途の埃にまみれ、話すこととい

えばひどく似通つていて、まるで同じ書物から学んだようだった。だれもが同じ奇跡を引き合いに出し、その奇跡を見たと言う。あるナザレ人^{びと}が目の前で水を葡萄酒^{ぶどうしゆ}に変え、数匹の鰯で群衆の腹を満たした、と言うのだ。ある者は、主は自分たちの目の前で空へ昇つていかれた、目も眩^{くら}むほどの光に包まれ、鳩か何かのように天に達せられたと証言した。生き証人として連れている盲人たちは、その光に目を焼かれたが、代わりに魂の光を授けられたと言った。

そして、だれもが神の子であると言い、神の子の子であると名乗った。ひと切れのパンと一壺^{いっこ}の葡萄酒の代わりに永遠の生命と至福を約束したが、村人に猛犬をけしかけられ、門口から追い立てられると、今度は、そういう者は永遠の地獄に落ちて、小羊^{こやぎ}が丸焼きにされるようにじわじわと身体を焼かれるだろうと言つて脅すのだった。

説教師のうちには、話し上手もいて、疑い深い民衆や、もっと疑い深い役人たちに、魂のことはかりではなく、肉体のことや、農耕や牧畜についても、多くの難しい質問にうまく答えた。若者たちにはニキビを治してやり、乙女たちにはどうすれば処女を守り、処女たることに楽に耐えられるか、衛生上の助言を与えた。老人たちには死の訪れにどう備えるか、裁きの日にどんな言葉を語ればよいか、光へと導く峡谷を楽に抜け出すために手をどう組めばよいかを指示した。母親たちにはどうすれば高価なまじない師にも薬にも金を使わず安全に子を産めるか、どうすれば息子たちを戦争から守れるかを助言し、また子宝に恵まれない女たちには、彼らが聖霊と呼んでいたものに胎内を満たさせるために、日に三度、空腹時に、唱えるべき単純明快な祈りの文句を教えた。

そして、何もかも無償で行ない、一銭の金も取らなかつた。ただし、感謝して受け取るパンの耳や、わけのわからぬ言葉を呟きながら、ひと息に飲み干すひと碗の冷たい水を報酬に数えなければの話だ

が。このように説教師たちがしきたりや言葉の違うさまざまな地方から、後から後から続いてやって来ては、髭をたくわえた者もあれば、髭のない者もあったが、だれもが同じようなことを語るのだった。ひとりが仄めかしたことをもうひとりが確証する、ただ細部が増えてゆき、その結果、若干の相違はあつても、奇跡とそのナザレ人の魅りの話は次第に説得力を帯びてくるのだった。ユダヤやサマリヤやアナトリアの民は、この埃まみれのサンダルを履いたおとなしい若者たちが胸のあたりに手を組み、乙女のような声で語り、天を仰いで歌うのにもう慣れていた。冷たい水とパンの耳を施すと、彼らは感謝してお返しに永遠の生命を約束し、死後に行き着くであろう素晴らしい情景を描いてみせる。そこには荒れ野はない、砂もない、蛇も蜘蛛もない、ただ棕櫚の木が葉を広げ、歩みを進めるごとに冷たい水が湧き、草は膝の高さまで、そして膝より高く茂り、日は穏やかに照り輝き、夜は昼のようで、昼は果てしない。牛は牧場に遊び、山羊や羊が草を食んでいる、一年中、どの季節にも花が香り、そこは永久の春なのだ。鳥はいないし、驚もない、日がな一日、ナイチンゲールが歌い続けるばかりである、などなど。

この楽園の情景は、初めのうちはだれの目にも滑稽で、ありそうもないことに映つたのだが——いったい永遠に太陽が輝き、痛みも死もないところなど見た者があつただろうか——あの穏やかな青い瞳の青年たちがあまりにも確信に満ちて熱心に描いてみせるうちに、皆も青年たちを信じるようになった。嘘も長いこと繰り返されると、人はそれを信じるようになる。信じることが人々には必要なのだ。多くの若者たちが紐の長いサンダルを履き、彼らについて出ていった。一年か二年で村に戻る者もあり、十年も戻らない者もあった。長旅に疲れ果て、髭には白いものが目立った。今度は彼ら自身が静かに語るのだった、両手を下腹に組んで。その人の奇跡について語り、その人の教えについて語

り、そして奇妙な律法を説き、肉体の喜びを蔑み、質素な衣をまとい、ほどよく食し、両の手で聖杯を高く掲げて葡萄酒を飲むのだった。だが、反論したり、彼らの教えやその人の奇跡に疑いを挟んだり、永遠の生命や楽園を疑ったりする者があれば、その者には気の毒だが、思いがけない激しさでかんしゃくを起こす。そういうときには、その男に向かい、生き生きとした激しい言葉で、炎のような脅しの言葉で、永遠の償いという罰を描き出してみせるのだ。「彼らの悪の言葉と呪いから、神々があなたをたをお守りくださるように」と、ある異教徒は書いている。

疑い深い者には甘い言葉や約束、賄賂や脅迫を用いる術を心得ていて、勢力が広がり信者の数が増えてくると、ますます力をつけ、横暴になっていった。彼らの教えに少しでも疑いを表明する者があれば、家族の者を脅し、人々のあいだに争いの種を播き、陰謀の網を張り巡らす。手先の挑発者や扇動者を従え、秘密の審判では破門や罰が宣告され、敵対者の名簿が焼かれ、かたくなな者には呪いの言葉が浴びせられるのだった。彼らに加わる人々の数は増えていった。それは忠実な者に褒美が与えられ、服従せぬ者は罰せられたからである。

魔術師と呼ばれるシモンが現われたのは、つまり、ちょうどそんな時期であった。

彼は、使徒たちの説く神は暴君であり、暴君は理性ある者にとつて神ではありえないと説いた。あの彼らの神、エホバ、エロヒムは、人間に憤り、その首を絞め、喉をかき切り、疾病をもたらし、野獣を送り、蛇と毒蜘蛛、獅子と虎、稲妻と雷、黒死病とらい病と梅毒、大風と嵐、旱魃と洪水、悪夢と不眠症、若さの哀しみと老いの無力を送ってくる。我々の幸いなる祖先を楽園に住まわせたが、最も甘い果実は与えなかった、人間が手にするに値する唯一の果実、人間を犬や駱駝や驢馬や猿から区別する唯一のもの、すなわち善悪の知識を。

「私たちのあの不幸な祖先が、好奇心に駆られて、その果実を手に入れようとしたそのとき、あの私たちの、あなたがたのエロヒムは、あの全き者、大いなる者、全能の神は、いったい何をしたか。何をしたというのか」シモンは、ぐらぐらする樽の上で揺れながら声を張りあげる。「それはあなたがたもよく知っていること、わかっていることだ（毎日のようにあなたがたの使徒たちが、神の僕や奴隷たちが説いているのだから）。黒死病やらい病を患う者のように追い払った、情け容赦もなく、炎の剣を持ち追い払ったのだ。なぜか。なぜなら、それは他人の不幸を喜ぶ神、意地悪で妬み深い神だからなのである。神は自由の代わりに隷属を説き、反抗の代わりに服従を、喜びの代わりに禁欲を、知識の代わりに教義を説く……。ああ、サマリアの民よ、あなたがたを憎む者があなたがたの家を壊したのは、ついこのあいだのことではなかったか。あなたがたの畑に旱魃や蝗を送ったのではなかったか。あなたがたの村から何十人もらい病人を連れ去りはしなかったか。一年前には、恐るべき黒死病でああなたがたの家を荒れ果てさせなかったか。遠い祖先の犯したとかいう罪ゆえに、あなたがたにまで、まだ等しく報復するとは、いったい何という神なのか、それがあなたがたの使徒たちの呼ぶ正義の者なのか。私たちの祖先が、好奇心に駆られ、知識を生むその燃えさかる火に追われて、あえて林檎の実を取ったがゆえに、黒死病を、稲妻と雷、疾病、哀しみと苦しみを送りつける者が、はたして正義の者なのか。それは、サマリアの民よ、神ではないのだ、それはあなたがたを憎む者であり、完全に武器で身をかため、炎の剣と毒矢で武装した天使の一隊を率い、あなたがたの行く道に立ちはだかる追いはぎであり、強盗なのだ。無花果の実が熟すと疫病を送り、オリーブの実が熟せば嵐を送って実を落とし、雹を降らせて実を地中に埋め、これを泥にしてしまう。羊が子を産めば黒死病を送り、さもなければ狼か虎を送ってその柵囲いを荒らす。あなたがたに子供が生まれればひきつけを起

こさせて、その命を縮める。なんという神なのだ、こんなことをする者が、どうして正義の者なのか。いや、これは神などではない、これはあの天にまします者ではない、エロヒムではない。これは何か別の者なのだ。なぜならエロヒムは、天と地、男と女、蛇と鳥を創りたもうた者、生きとし生けるものすべてを創りたもうた者、海より高く山を築き、海や川や大洋を、緑の草と棕櫚しゅうの木陰を、太陽と雨を、大気と火を創りたもうた者、それこそがエロヒム、正義の神なのである。ペテロやヨハネやパウロやその弟子たちが、その教えをあなたがたに説いている者、その者こそ強盗で殺し屋なのだ。そして、ヨハネとパウロ、ヤコブにペテロがその神について、神の御国について語ることはすべて、すべてが偽りなのだ、さあ、聞くがいい、サマリヤの民よ。彼らの言う選ばれた地は偽りだ、彼らの神は偽りだ、彼らの奇跡はことごとく偽物だ。彼らが嘘偽りを言うのは、誓いを立てた神もまた偽りだからで、だから始終、嘘をつく、嘘で編み上げた大きな籠の中に入ってしまったので、嘘をついているのが自分でもわからない。だれもが嘘をつくところには、嘘つきはひとりもない。何もかもが嘘なら、何ひとつ嘘ではない。天上の王国、正義の王国は偽りだ。あの者どもの神に付けられる限定詞ひとつひとつが偽りである。正義の、嘘だ。真実の、これも嘘だ。唯一の、嘘だ。不滅の、嘘だ。それから、あの者どもの書物も偽物である、偽りを約束するからだ。天国を約束するが、その天国は偽りである、なぜなら彼らの手のうちにあるのだから、なぜなら彼らが、炎の剣で武装したあのお方の天使が、偽りの天秤を持つ彼らの審判が、天国の門に立っているのだから」

民衆はシモンの言葉を冷やかに疑心暗鬼で聞いていた。扇動者の話を聞くときと同じように、はつきりしない言葉の裏に隠された意味を探りながら。民衆は権力者や役人やパリサイ人びとが口先ではうまくいことを言い、約束をしながら、実は騙したり脅したりゆすったりするという事実にも、もうすつか

り慣れていた。そこで、民衆は待つていた、こいつも正体を現わすだろう、ついにはここにやつて来た本当のわけを、この空しい言葉や、明瞭さと意味を欠いた、このはつきりしない演説は何のためなのかを言うにちがいないと。だから、ずっと話を聞いていた。最後には、せめて曲芸とか奇跡とかで、ほんやりした話の辻褄を合わせるだろうと期待していたのだ。

「天の王国は嘘で固めた礎の上に築かれている——無慈悲に照りつける太陽を見上げて、シモンは言葉を続けた——そして屋根は嘘と出鱈目という二つの水の上にある。彼らの文書もまた偽りの言葉と偽りの律法でできている、戒めそれぞれがひとつの嘘で、十誠とは十の嘘なのである。彼らのエロヒムは暴君で、執念深く、底意地の悪い老人のように悪いというだけでは足りず、なんとこの神を崇め、神の御前にあつては地にひれ伏し、神のこと以外は何も考えてはいけないと言う。この神を、あの暴君を、唯一だの全能だの正義だのと呼べと言う。そして、唯一なる神に従えと言う。ああ、サマリヤの民よ、おまえを訪ね、嘘と偽りの約束で耳を満たすのは、いったいどんな山師なのか。そいつらは神の寵愛を独り占めにして、あなたがたには文句を言わずに神に従え、人生のあらゆる苦しみ、傷、病、地震、洪水、黒死病に耐え、しかも神を呪ってはいけないと言う。なぜ神の名をみだりに口にするかを禁じたりするのか。嘘なのだ、サマリヤの民よ、言っておくが、ペテロとパウロが述べ伝えるすべては嘘なのだ、すべては彼らの弟子たちの嘘と出鱈目なのだ、すべては恐ろしいとんでもない欺瞞なのだ。だから、汝、殺すなかれ、と言う。殺しは神の、彼らの唯一の、全能の、正義の者の仕事なのだから。揺り籠の子供を、産褥の母を、歯の抜け落ちた年寄りを屠り殺すのはあのお方しだいである。あの神の御業なのである、だから、汝、殺すなかれ。殺しこそあのお方とその僕たちの為すべきこと。彼らだけに許される。彼らは狼になるように、あなたがたは羊になるように定められ

ている。だから、サマリアの民よ、彼らの掟に従うがよい。……だから、汝、姦淫するなかれ、と言う、彼らが自分のためにおまえの娘の花を持ち去ることができるよう。汝、隣人を妬むなかれ、と言う、妬むべきものなど何もないのだから。彼らはおまえのすべてを求め、魂も肉体も、精神も思想も、そしてその代わりに約束を与える。おまえの現在の服従、現在の祈り、現在の沈黙に対して、口から出まかせの約束を与える、未来を約束する、ありもしない未来を……」

村人はもう散り散りになり、話を聞いているのはシモンの弟子を自称している者たちばかりだったが、シモンはそれに気づかなかった、いや、気づかないふりをしていただけかもしれない。その間、シモンの忠実な付き人だったソフィアは彼の額の汗を拭い、水差しを手渡ししてやっていた。水はすっかり生ぬるくなっていた、水差しは砂に深く埋めてあったのだから。

ソフィアは三十あまりの女で、小柄な身体に豊かな髪、瞳は山査子さんざしの实のように黒かった。透き通った明るい色のマントをはおり、その上に、インドで買ったにちがいない、色とりどりの絹のスカーフをしていた。シモンの弟子たちは、この女こそ知恵の権化であり、成熟した女性の美しさそのものであると言っていたが、キリスト教徒の巡礼者たちはこの女についてありとあらゆる噂を流していた。はすっぱ女、売女、炎の女、尻軽女、そしてシリアの売春宿からまっすぐ同行の詐欺師の慈悲に与るあずかことになった女詐欺師。シモンはそれを否定しなかった。女奴隷で情婦という女のこれまでの運命は、エホバの冷酷さとこの世の苛酷さのわかりやすい例として役にたった。それは例であり教訓であった。この堕ちた天使、迷える小羊は神の冷酷さの犠牲にすぎないと、彼は主張した。人の肉体に囚われた淨らかな靈魂である、と。この女の霊は何世紀にもわたり、器から器へ移るように、肉体から肉体へ、幻から幻へと移り住んでいる。女はロトの娘であり、ラケルであり、そして美しいヘレナだったので